

権力の視点にもとづく社会分析（上）

——バートランド・ラッセルの権力論を中心として——

小 野 修

1 は し が き

二十世紀のはじめ頃までのほとんどの政治的著作は、一般的に見て政治哲学的な傾向をもったものであった。その頃までの政治研究は、政治にかんする哲学と政治にかんする科学の未分化の上に築かれていたために、経済学がいち早く実証科学的な発達をとげつつあったのに比べて、政治学は相変らず理念と現実の境をさまよっていた。

十九世紀は、その前世紀から受けついだ様々な哲学的世界観が成熟し葛藤し合うつぼのような時代であったが、次々に起ってくる現実的な政治の問題が、その解決の方法を求める政治家や政治思想家の努力を圧倒していった時代でもある。政治的課題の戦線は量質ともに拡大する一方であり、研究者は、その拡大する一方の対象へのアプローチの仕方をまず考えねばならなかった。二十世紀に入って急激に増大した民衆の政治的参与の事実が国家権力の性質と規模を変えたために、旧来の理論では制御をすることが難しくなった。このような時代的な背景のもとに、社会学・

心理学のような新しい科学が徐徐に成長しはじめ、それは自然科学の実証的な方法に範を求めつつ、政治学を含む社会にかんする諸分野の研究領域に浸透しはじめた。しかし、政治学がこうした実証科学の方法を積極的にとり入れて発達しはじめたのは、もっと遅く、研究者の間においては、第一次大戦後であり、一般の大学の学生が実証的な研究方法を教えられる機会を得るに至ったのは第二次大戦後であった。

純粹に政治にかんする科学と言い得べきものがあるかどうかは別として、今もなお、大学における多くの政治学の講義は、科学的であるよりはむしろ、思弁的で政治哲学的なものである。そこでは、政治現象の運動法則が論議される以上に、政治、とりわけ、政治体制にかんするイデオロギー上の論議が繰り返されることが多い。しかし、筆者は、こうした政治学教育のあり方は是非を論じているわけではない。政治学においては、今日もなお、科学と哲学が相変わらず混淆し合った状況を脱しきれないことを指摘するのみである。¹

2 政治学と分析哲学

今日の政治にかんする科学は、その源流のひとつを實証的な英米の政治学者たち、とりわけ、アメリカのシカゴ大学の研究者グループに求めることができる。シカゴ大学を中心とする政治学者は、メリアムのように、すでに一九三〇年頃には実証的な研究方法にもとづく現実的な政治理論を展開していたが、三〇年代の後半ナチスの抬頭によって、ドイツ、オーストリア等から亡命してきたウィーン学派の人々をシカゴ大学・カルフォルニア大学などをはじめとする米国内の諸大学に迎え入れることによって、政治の科学的研究の傾向を一層強めることになった。ウィーン学派は自然科学者を中心とした新しい科学的方法論の追及をめざす人々のグループであり、その主張として名をなした論理

実証主義は、哲学に言語分析という方法をもち込むことによって、哲学に客観性を与え、哲学の成果が科学のように累積的になるよう目指すものであった。この運動はそれ自体、今世紀はじめ頃より発展しはじめたケンブリッジ学派の方法とも類似し、またその影響下にもあった。ケンブリッジ大学のトリニティ・カレッジに属していたホワイトヘッド、ラッセル、G・E・ムーアなどの哲学上の業績はウィットゲンシュタインやA・J・エアなどウィーン学派との交渉をもった人々によって、ウィーン学派にも影響した。やがて、ウィーン学派の人々がナチスによってアメリカに移住し、また、ホワイトヘッド、ラッセルなどをはじめとするケンブリッジ学派の人々がアメリカで教鞭をとるようになり、分析哲学といわれる哲学上の潮流は、アメリカに根を下した。この思潮は、単に論理や意味分析といった抽象的な数理哲学上、論理学上の影響にとどまらず、哲学ならびに社会科学の方法論の上に大きな影響を及ぼした。

一九三八年、ラッセルは『権力——新しい社会分析』Power—A New Social Analysis と題した著作を公けにし、いわば政治学上において分析哲学の方法を応用する範を示した。

ラッセルは一九三八年から九年にかけて、シカゴ大学において、三九年から四〇年にかけて、カルフォルニア大学において哲学の講義を担当し、同四〇年、ハーヴァード大学でウィリアム・ジェームズ記念講演を行っている。ラッセルの分析哲学上の理論展開が最もめざましく行われたのはこの時代であった。第二次大戦後、一九五三年、オックスフォード大学のウェルドンは『政治用語』The Vocabulary of Politics を世に送り、政治学への言語分析の方法の適用を示し、相当の反響をよんだが、こうした試みは、すでに第二次大戦前までに、ラッセルが色々の論文の中で為しとげていた作業の延長であり、集大成なのである。ウェルドンの作業の意義は、政治論議における表現や用語選択によって、できる限り客観的で公平な政治学の建設を図ろうという啓蒙的な点にあり、A・J・エアが一九三六年

に『言語・真理・論理』Language, Truth and Logic を世に送ってラッセルの開拓した哲学のフロンティアの優れた紹介者をつとめたのに似ている。もっとも、ウエルドン自身は、同じオックスフォード大学の言語分析派哲学者であったJ・L・オースチン(これは分析法学者のオースチンとは別人)の影響を認めても、ラッセルの影響を認めたがらないかもしれない。² いづれにせよ、ラッセルの『権力』とウエルドンの『政治用語』の及ぼした影響は大きく、今日の政治学はその里程表とも言えるこの二著を除いては語ることはできないまでになっている。

3 『権力』の時代的背景とその位置

I ラッセルの『権力』の出版された一九三八年は第二次大戦勃発の前年にあたり、ヒトラー政権下のドイツはオーストリアを併合し、チェコスロヴァキアのズデーテン地方に介入し、その紛争解決のために英仏独伊の四ヶ国代表によるミュンヘン会談が九月末ひらかれた年であった。その直後の十月、ドイツ軍はチェコスロヴァキヤとの国境を越えて侵入し、ナチスの侵略的な姿勢が世界に示された。一方、日本はその前年、中国大陆に進攻し、年末には日独伊防共協定を結んでおり、増大するファシズム勢力と国際連盟加盟国との決戦は避けられない様相を示しはじめていた。また、革命後二十年を経たソ連は一国社会主義の政策のもとに、一九三七年第三次五ヶ年計画にかかり、着実に重工業政策をすすめていた。

このような時期に出版された『権力』は、その年のうちに三版を重ねた。ラッセルはすでに六十四才に達していたが、筆致にいささかの衰えも見せてはいなかった。すでに主要著作の数は四十冊を越え、その半数近くは政治的社会的著作であった。ラッセルは一八九六年に最初の著作『ドイツ社会民主主義』German Social Democracy を世に問

うて以来、多忙な哲学上の研究の間にあつてもつねにその時代の政治情勢を展望する論文の執筆を怠らなかつた。彼にとって、政治的活動はいわば第二の天職であつた。その政治上の著作は、殆んど時代的な焦眉の課題に向けられており、読者を広く大衆に求めた彼は職業的政治学者の書くような抽象的な政治の一般理論のテキストは書かなかつた。しかし、それぞれの著作が時代的制約を越えて今日も読まれる理由のひとつは、著者の情勢把握の確かさ、明快で魅力的な文体と、人間の自由を求めるそのヒューマニスティックな立場にあると思われる。

一九三〇年代、つまり両大戦間の時代の後半にラッセルのあらわした主な著作は次のようなものがある。『幸福論』（一九三〇）『科学的展望』（一九三一）『教育と社会秩序』（一九三二）『自由と組織、一八一四—一九一四』（一九三四）、『怠惰の讃歌、他篇』（一九三五）『宗教と科学』（一九三五）『平和への道』（一九三六）『決定論と物理学』（一九三六）ならびに今論及しつつある『権力』（一九三八）である。この多方面にわたる著作は、二〇年代以来、ラッセルがいわば筆一本で生活を支えていた様子を遺憾なく物語っている。³

J・A・エアは『社会改造原理』Principles of Social Reconstruction, 1916 をラッセルの政治的著作の最高におき、⁴ アラン・ウッドは『自由と組織』Freedom and Organization — 1814-1914 —, 1934 を非哲学的著作のうち最も価値が高く、最も読みやすいもののひとつとして⁵ いるが、現代政治のダイナミズムを捕える力としては、この『権力』はラッセルの他の著作を遙かに凌いでいる。『社会改造原理』はまだナチズムもソ連もなかった時代に書かれた書物であり、第一次大戦後の平和建設という夢を一杯にはらんでいる点において、今日の読者にはやや無邪気に見え物足りない思いをさせるだろう。一方、『自由と組織』は、近代国家の消長の歴史的分析であつて、いわば『権力』の執筆のための準備的作業とすることもできる。多くの現代政治思想の研究書が、ラッセルの代表的著作として『権力』

をとりあげるのもこうしたことのためであろう。⁶

Ⅱ ラッセルは一九世紀末から核兵器の今日までの政治的変動の中を生きつづけたいわば二十世紀の時代的証人とも言うべき哲学者であるが、その七十余年にまたがる著作は、時代の推移に従って、追及する問題の焦点が変ってきている。彼の政治的著作は、大ざっぱに次の四つの時期に分けて考えることができる。

一 十九世紀末より第一次大戦の開戦まで（一八九六——一九一四）——この時代においてラッセルは、アカデミックスな書齋人らしい政治的見解を公けにしており、マルクス主義経済思想の影響から社会主義への夢を抱いてはいたが、政治的实践へは足を踏み入れていない。経済重視の時代。

二 第一次大戦の開戦から革命後のソ連の訪問前まで（一九一四——二〇）——大戦の勃発と同時に回心に似た心理的契機をへて、反戦運動に挺身、執筆は平和建設への模索であった。著作は人間心理の分析を重視するようになる。大衆社会の人間性に注目した時代。

三 革命後のソ連訪問から第二次大戦の終結までのファシズム批判の時代（一九二〇——一九四五）——革命後のソ連を訪問し、統制国家の現状に失望し、権力馴致の問題は、左右のイデオロギーを越えて、民主主義政治のための重要な課題と自覚した。ファシズムの抬頭は権力組織の問題にたいするラッセルの関心をたかめた。社会機構のあり方に新たに注目をしはじめた時代。

四 第二次大戦後から今日まで（一九四五——）——広島・長崎への原爆投下に衝撃を受け、核戦争による人類滅亡の可能性を説き、積極的に核兵器撤廃運動を組織し国際的平和運動の中心的人物の一人として活動する。国際的平

和運動の組織と指導の時期。『権力』が属するのは第三の時期である。

4 権力への衝動

I 『権力』の発想の基礎を支えるのは、権力への衝動が人間にとっての根本的な衝動であって、それが人間を動物から区別するという考え方である。この想定は、必ずしも、動物生態学の研究にもとづいて言われているわけではなく、たとえば人間に最も近い動物であるサル集団において、権力関係に似たものが見られるといった点は見逃されている。しかし、こうしたことは問題の本質に触れるものではない。人間のもつ権力への衝動は、動物のそれに比して極めて大きく、いわば満足を知らないほどに強いという意味にとればよい。というのも、この権力衝動の概念は、いわば、仮説であって、ラッセルはあくまで、社会分析のための用具^{ツール}として用いているからである。

『権力』の中で最も多く引用される部分は第一章の次の箇所である。

この書物において、私は、社会科学における基礎的な概念が権力であることを証明することにしよう。ちょうど、エネルギーが物理学の基礎的概念であるような意味において、エネルギーと同じように、権力も様々なかたちをとる。例えば、富、軍備、官憲、世論への影響などである。(B. Russell, Power, A New Social Analysis, 1938 (Unwin Books, 1963) p. 9 以下、『権力』からの引用はすべてこのアンウィン・ブックスの頁数を記す)

この仮説は、それまでに類例のないものであっただけに、新しい問題提起としてきわめて注目すべきものであった。この仮説は、ひとつは、マルクス主義の社会理論が経済的な利潤追求に人間の根本衝動を見ようとする傾向をもつことへの批判として、第二には、ラッセル自身のそれまでの理論の不備をおぎなうという形で生れたと見ることができ

る。第一の点について、ラッセルは次のように述べている。

この問題にかんしてはマルクスを含めた正統派経済学者たちは、経済的な自利^{セルフィンタレスト}を基本的な動機として、社会科学でとりあげうると考えた点において誤っていた。（Power, Ibid., p. 9）

注意すべきことは、ラッセルはマルクス主義批判の目的でこの書物を書いたわけではなかった。この書物の目指す批判の相手は、全体主義的な傾向をもった国家権力であり、それは左右のイデオロギーを越えたものであった。平等の理念の実現のために自由を犠牲にしたスターリン政権、平等の理念の実現を阻もうとする資本の勢力に組して自由それ自体を踏みにじったファシズムの政権が批判の対象の中心であった。⁸ マルクス主義の経済学説にかんしては、その基本的部分においては、ラッセルの考えも一致している。ラッセルは多元的な理論的立場をとっており、経済的要因を過大視することを避けたのである。

第二の点、即ち、自説の補正については、ラッセルのそれ以前の著作を比較することによって推測することができる。一九一六年刊の『社会改造原理』一九一七年刊の『政治理想』などに見られる見解、即ち、前章（2のⅡ）で述べた時代区分中、二にあたる時期のラッセルの傾向によって、個人の心理の分析を基礎にし、人間の基本的衝動を所有的なものと創造的なものに分けたが、この概念のみでは、一九三〇年代のダイナミックな権力社会の動きの分析、とりわけ組織の問題の分析にはもはや不十分であると悟ったためであろうと思われる。いいかえれば『権力』に至って、ラッセルの社会分析の方法は、個人から出発する方法より、社会それ自体を組織として把えるようになったといふことができる。それと同時に社会の改革を個人の心理にかかわる問題としてではなく、組織の問題として考えるようになった。権力衝動は個人から起きて社会的に発揮されるという点において、社会分析の概念としては非常に便利

なものであった。

ラッセルは、権力はエネルギーのように、時と場合にに応じてその形を変えするという。権力はある場合には、富・榮譽・宣伝などのかたちをとる。経済力も後に見るように権力の変容のひとつのあらわれにすぎず、それひとつだけをとり出して考えると誤りをおかすことになるというのである。

Ⅱ 権力衝動のあらわれ方について、第二章でラッセルは次のように述べている。

権力衝動のあらわれ方があからさまな場合が指導者であり、イクスプリシットはつきりしない場合はその服従者となる。もっとも純

粋に協力的な作業においては、このことはあてはまらない。しかし、殆んどすべての組織において、この指導者と服従者との関係が見られる。こうした権力関係が生ずるのは組織においては誰かが命令し、誰かがそれに従わねばならないという外的な必要性のためであると同時に、今ひとつは人間性に根ざす内面的な理由のためである。ある人々はつねに命令する性格をもっており、他はつねに従おうとする。その間に普通人があつて、状況に応じて命令する側に立ったり従う側に立ったりする。歴史にのこる指導者たち、たとえば、クロムウエル、ナポレオン、レーニンなどにおいては、彼らの自信は表面だけではなく、深く無意識にまで浸透しているものであった。クロムウエルとレーニンはともに、人間世界のものでない高尚なものの目的に仕えるように命ぜられたという深い宗教的信念の持主であった。一方、ナポレオンは幸運に恵まれた兵士の例で、ムッソリーニもこのタイプに属する。その行動のパターンはむしろ利己的であり、貪欲に走る俗人である。一方服従者は何らかの意味で恐怖のために服従を選んでゐる。しかも、こうした二通りのタイプは応々にして社会的危機の場合にはつきりした姿をとってあらわれる。たとえば戦争の脅威が国

民の連帯性をたかめる一方、それは独裁権力の可能性をもたらす。問題は、社会的協力を破壊することなしに、連帯性のもたらし危機、たとえば戦争をいかに防止するかということなのである。

こうした指導と服従の二つのタイプとは別に、ラッセルは権力関係から身を引く第三のタイプ、即ち隠者 *refuge* をあげている。このタイプの人々は、身に合わぬ社会機構をのがれて、孤独な自由を楽しむことのできる隠れ場を求める人である。隠れ場は精神的な場合もあれば肉体的な場合もある。

集団的な狂気というものも、臆病がもたらす組織化の促進の結果である。臆病な人々は集団の中にひたひこむことによって、権力を共有するという甘美な情感を味うことができる。これが往々にして、普通では考えられない集団的な暴力行為に走らせるのである。しかも、この種の陶酔感はいったん味をしめたものには忘れられないもので、更に一層強い刺戟を求めるようになってくる。

興味深いことは、ラッセルが指導者の二つのタイプをあげていることである。ひとつは雄弁家タイプ *orator type* であり、今一つは、機械力に頼る寡頭政治の執政者 *the oligarch who depends upon mechanical power* である。雄弁家はいわば一種の大衆煽動家であり、戦争などの危機に出現して大衆を情緒的に刺戟し集団的な昂奮状態を利用して、権力を強めてゆくタイプの指導者である。このタイプは、理性より感情、品性より意欲を重視しがちで、個人より集団に価値をおこうとする。一方、機械化型の政治家は、近代科学技術の成果によって、まず物を支配し、それによって得た力によって人間を支配するタイプの指導者である。このタイプは機械の統御によって習得した非人格的な眼で大衆を眺め、ひとりひとりの人間の幸福などに深い関心を抱いたりしない。大衆は機械作用同様操作すべき単なる素材としての存在にすぎなくなる。こうした指導者の一例として、飛行士出身であったムッソリーニをあげ、

アビシニア戦争の際、彼が機上から、現地人の集団に爆弾を投下しつつ地上の地獄図を見下して痛快がる様子を伝えたムッソリーニの手記を引き合いに出している。

ラッセルがこれを書いた第二次大戦前の時代では、むしろ雄弁家タイプの指導者が一般的であり、機械化タイプの指導者は少なかった。しかし、ラッセルはすでに当時において、今日のベトナム戦争のような非人道的な戦争の可能性を予見していた。次の文章は、さながら、今日のベトナム問題について書かれたもののように錯覚させる。

技術的に訓練された寡頭政府が、航空機、艦船、発電所、自動車輸送等々を手中にして、ほとんど民衆を手なづける必要もないまま、独裁権を確立することもありうる。科学技術者ならば、抵抗する地域を飢餓に陥れることもできるし、光、熱、電気などの便宜に頼らせておいて、次にそれを奪い取ることもできる。また、その地域を毒ガスや細菌で覆うことも可能である。こうした体制の特徴は過去のかなる暴政にも増して、冷酷で非人道的なものとなるであろう。(Power, Ibid., pp. 21-2)

Ⅲ その当時すでに歴史はスペインのゲルニカでの空爆の惨事を記録し、スペイン人のピカソはそれをテーマにした大作を描いて、戦争の苛酷さとファシズムに抗した。第一次大戦で毒ガスが用いられたことはまだ記憶に新しかったが、広島悲劇はまだ起っていないなかった。しかし、ラッセルは科学技術が必ず将来の戦争で利用されることと、その災厄の大きさを予想していたからこそ、政府権力の制御や馴致の必要を痛感していたのだった。彼が第二章の末尾を「権力を手なづけ、人類全般のために奉仕させるようにしない限り、世界に平和はない。すでに科学が万人を不可避的に生死の瀬戸際に立たせてしまっているからである」と結んだとき、彼は科学技術時代の政治権力論が、今まで

の政治権力論と同じものであっては役立たないと考えていたのに違いない。

5 権力の諸形態

I ラッセルは権力を「意図した結果をつくりだすもの」the production of intended effects (Power, Ibid., p. 24) 定義している。この定義は権力を非社会的な能力まで含めたものであるが、著書『権力』の中心的課題は、あくまで社会権力であった。従って、それは優越せる意志力といった従来の権力概念が、可能性の面で権力を把えたのに対し、意図した結果をつくり出すものといった能力に重点をおいた点において、より力学的に権力を把えることができる。⁹

一九二三年、即ち『権力』より十五年前に発行された『産業文明の展望』The Prospects of Industrial Civilization において、ラッセルは権力を、「我々の欲望の影響がない場合には違ったように行動すると思われる人々を、我々が望むままに動かす能力であり、我々の希望に反して人々が行動することを阻止する能力」と定義していた。¹⁰ この定義より『権力』における定義は包含する領域をひろげてきているが、厳密には、ラッセルは社会関係という言葉を加えて、「社会関係において意図した結果をつくり出すこと」とでもすべきであっただろう。しかし、社会関係はもとより社会科学の前提なので、その必要もないかもしれない。いづれにせよこうした定義の語句上の厳密さは、この場合さほど重要ではない。本書におけるラッセルの分析が、後に見るように権力についての充分な展望を可能にさせているからである。

II 権力の諸形態——ラッセルは権力を人間に向けられたものと、生命のない物質、もしくは人間以外の生物に向

けられたものに分ける。人間に対する権力は、個人に対する影響の仕方と、関係する組織の形態によって分類できるとする。これを表にまとめると次のようなものとなる。

個人への影響の仕方

組織体の種類

- A 物理的強制力による方法……………国家（軍隊・警察など）
- B 賞罰を通じての誘導による方法……………経済組織
- C 意見に影響する方法……………学校、教会、政党

しかし、これは厳密な区別ではない上、それぞれの組織体もそれに特有の権力のみを行使するわけではないとラッセルはことわっている。¹¹

ラッセルは法の究極的な権力は国家権力の強制力にもとづき、法はこの強制権力の行使のための一連のルールであると考えている。しかし、効果的な力を持った法は、警察力以上に国民の世論や感情に依存するものであるということから、ラッセルは権力をその支持のあり方においてとらえた次の三つの概念を示した。

- 一 伝統的権力 traditional power
- 二 革命的権力 revolutionary power
- 三 むき出しの権力 naked power

この三つの権力の様相は、いわば歴史的、時間的な過程を通りつつあらわれるのであって、さきにあげた三つの分類——それは組織の性格にもとづいてなされたものであるが——と組み合わせることができる。一つの伝統的権力は、のちの章で検討されるように、僧侶や王の権力によって代表される種類の権力で、その権力の正当性は習慣の上に基

礎づけられている。そのため、それが安定している間は、物理的強制力に頼る必要は小さく、もっぱら、世論にもとづく政治を行う。伝統的権力が終ると、そのあとを受継ぐのは、むきだしの権力ではなく、国民の大多数の積極的な同意、もしくは、かなりの大きさをもった少数派を支配してきた革命的権力がとってかわる。この革命的権力は、むきだしの権力に頼らない場合は、伝統的権力以上に活発で能動的な民衆の支持を必要とする。むきだしの権力とは、伝統とか同意に依存しない軍事的権力であり、もっぱら物理的強制力にその基礎をおいている。従ってそれは内に向えば暴政となり、外に向えば侵略のかたちをとる。アレクザンダー大王とかシーザーが侵略において発揮したのはむきだしの権力であった。

Ⅱ 個人のもつ権力——組織が権力を獲得するのと、個人がある組織において権力を獲得するのとは方法の上で異なる。従って、組織がかわれば、違ったタイプの個人を上層に押し上げる。「一時代はその時代の秀でた個人を通じて歴史に姿をあらわし、その人々の性格から時代のはっきりした特徴をとり出してくる」(Power, Ibid., p. 29) とラッセルは書いている。従って、ある時代において傑出することのできる人物も別の時代においては目出たない存在となる。ラッセルはここで、紳士^{ジェントルマン}と知識人^{12 エグゼキューティヴ}と行政管理家の三つのタイプをあげることによって、時代的な変遷が如何にそれぞれの時代の権力の担い手たちの花形を変えてゆくかを説明したあと、民主主義時代の政治家もまた、時代の性格に左右されることを指摘する。

「最も成功を収めた民主主義的政治家は、民主主義を廃して独裁者になった人々である」(Power, Ibid., p. 33) というラッセルの逆説は、レーニン、ムッソリーニ、ヒットラーなどの抬頭は、民主主義を利用することによってのみ可能であったという考えにもとづいている。更に、政治の裏面において活躍する黒幕についても論及がなされている

が、ここでは省略しよう。

6 伝統的権力 traditional power

ラッセルは伝統的権力の代表的な例として、僧侶の権力と王権とをあげている。どちらも、今日衰微したものであるだけに、検討は行きとどいたものとなる。ラッセルは、歴史的な蘊蓄を傾け、豊富な実例をあげつつ、この分析を行っているが、ここではその骨格のみを伝えることにしたい。

僧侶、世俗を問わず永続的な成功を収めた人々はできる限り伝統に訴え、彼らの制度における新奇性を最小限にとどめたものであった。その場合、たいていは、多少とも虚構の過去をつくりあげ、その過去の制度の復活をねらうものである。ということは、伝統そのものの力の強さを裏書きしている。

I 僧侶の権力 priestly power——ヨーロッパにおいて僧侶の権力の史上最大のものはカトリック教会であり、その勢力は近世に至るまで王権を凌いでいた。この強さの原因と見られるものは、凡そ次の理由にもとづく。

一 法王権が世襲でなかったために、未成年者たちが法王の地位につくことがなく、法王は、大体において卓越した人物で学識や事情に通じていた。しかも、世俗の王たちと異り、情念を抑える訓練をへてきており、離婚問題などに悩む王たちを操ることができた。しかも、この世襲でないことの利点のために、法王庁は非人格的な連続性をもつことができ、一法王の死などによって揺ぎもなかった。

二 一方、そうした教会をしっかりと支えたものは、教会によって鼓吹された、民衆の教会に対する道德的尊敬であった。数々の秀でた聖人や高僧の行為が、世人に教会への信奉心をつくり上げ、それが腐敗した教権内部にたいす

る監視の目をにぶらせた。

Ⅱ 王権 *kingly power*——原始時代の酋長から王への過程は、すでに紀元前エジプトやバビロニアにおいて完成の域に達しており、以後の時代においてハムラビ王などに匹敵するような王国統治を見ることはできない。古代ギリシヤ、ローマ時代においては、王の名は好まれず、皇帝は事実上、軍隊の統率者である將軍にほかならなかった。ゲルマンの侵入によって君主政治が採用されるに至ったが、この君主も長老会議の協力が必要とし、この長老がやがて貴族となり、封建制がつくられる。従って君主政治もこれら封建貴族と教権を打破しない限り弱体に留まった。イギリス、フランス、スペイン等の新しい君主政治は、ナシヨナリズムと商業という二つの新興勢力の支持に依存して、教会と貴族階級の上に立つことができたが、新興勢力にとって王権が有用でなくなると革命が起った。というのは、商業は王と結んで封建的無政府状態に対決したが、実力がつきはじめると常に共和主義的になったからである。王は神権に訴えて、自己の権力を伝統的で擬宗教的なものにしようとしてたが、余り成功しなかった。

伝統的権力の崩壊は、権力者がそれに安住し、それを濫用する結果生ずる道徳的反抗によってはじまるものである。従って、宗教改革をもたらしたものは、必ずしも経済的な原因のみに限らず、こうした道徳的反抗に、ルターなどによって神学的根拠が与えられたためでもあった。

外部からこわされぬ限り、伝統的権力がつねにたどる発展過程がある、とラッセルは述べている。

伝統的権力は、人々に吹きこんだ尊敬によって大胆になった挙句、一般民衆からの是認について無頓着になり、是認が失われることなどはあるまいと思うのである。怠惰、愚行、残虐などによって、それが持つと称する神聖な

權威を疑うように人々をしむけてゆく。しかも神聖な權威などいうものは習慣に源をおいているものであるために、いったん批判が起れば簡単に打ちこわされてしまう。(Power, Ibid. p. 55)

7 むきだしの権力 naked power

伝統的権力を支えてきた信念とか習慣がくづれると、この権力は徐徐に新しい信念に立脚した革命的権力もしくはむきだしの権力に転じてゆく、とラッセルは言う。つまり、被支配者側の承諾を含まない種類の権力に屈してゆくのである。むきだしの権力とは、羊にたいする屠殺者、敗戦国民にたいする戦勝国軍、陰謀が発覚した場合の警察の陰謀者にたいする権力といったものである。むきだしの権力とは、物理的強制力それ自体にほかならない。

権力組織は通常三つの局面をたどる。即ち、一、成立期の狂信的な時期、二、安定した伝統的な時期、三、むきだしの権力の時期である。むきだしの権力が最も完全なたちで發揮された例は、古代ギリシャとルネサンス期のイタリアであり、いづれも高度の文明が、最低の道徳と結びついていた時代であった。

むきだしの権力のための理論的根拠を与えた代表例は、プラトンの『国家』の中でトラシマコス¹³の唱えた「正義とは強者の利益にほかならない」という見解と、マキャヴェリの『君主論』の思想であるが、こうした見解が受け容れられる時代や環境は、政治において秩序が欠けている場合であり、被支配者が権力を権力なるが故に尊敬する場合であるとラッセルは述べている。言いかえるならば、乱世においては道徳的抑制が働かず権力主義が勢力をうるということにほかならない。

しかし、大体においてむきだしの権力の時期は短い。その時期は、一、外国からの侵略により、二、安定した独裁

制の確立によって伝統化することにより、三、新興宗教の抬頭、といった理由によって終りを告げるという。

むきだしの権力のあらわれる状況は、たとえば、外国侵略に近年さらされたことのないといった社会の内政で、先ず二つ以上の狂信的な信条が覇権を争っている場合、次いで、伝統的な信念が衰えたものの未だ新しい信念によって受けつがれておらず、個人の野望には限りがないといった状況である。

近代国家においては、国家によるプロパガンダが効果的になってきたため、国家は必ずしもむきだしの権力の行使に頼らずともすむようになってきている。民衆の同意をつくりだすことは容易になってきている。この点については、いづれ後の章で論じられる筈である。

8 革命的権力 revolutionary power

ラッセルによれば、伝統的な体制は二つの崩壊の道をたどる。ひとつは、古い体制の基礎となっていた信条や精神的慣習がたんなる懷疑主義に敗れてしまい、社会的連帯は辛うじてむきだしの権力によってのみ保たれるという道である。今一つは、新しい信条が、新しい精神的慣習を加えて人々の心を次々につかんでゆき、ついには、もはや役に立たないと思われる古い信念にかわる新しい信念と結んで政府をおきかえるほどに強くなってくるという道である。

この後の場合が革命的権力の特徴である。革命が成功すれば、この権力はやがて伝統的権力へとかわってゆくが、革命が厳しく長引く場合は、再びむきだしの権力の葛藤に墮してゆく。その点においても革命的権力とむきだしの権力の違いはさほどに大きくなく、往々にして革命的権力がむきだしの権力に墮落することがある。¹⁴

革命的信条と伝統的信条が覇権を争う場合は、フランス革命の場合のように、敗者に対する勝利者の権力はむきだしの権力である。従って、革命的信念が強く、広範囲にある場合や、勝利がてまどらぬ場合にのみ、協力の習慣は革

命の衝撃に耐えて残り、新政府は単に軍事力に頼らずとも人々の同意に基くことができる。それに反し、心理的権威を欠いた政府は必ず暴政とならざるを得ない。

ロシア革命について、ラッセルは、それが歴史的に新しいため注意深く判断を控え目にしているが、革命の結果、政治権力と経済権力の混合体が生じ、政府の統制が極端に増大し、そのため自由が失われたことを指摘している。自由主義の衰退は、戦争や生産技術の進歩、宣伝方法の増大、ナショナリズムなどによってもたらされたものであるという。ラッセルは統治の技術としては、ファシズムを殆んど革命後のロシアと同じ次元でとらえている。ロシア革命の理念が何であったにせよ、当時ソ連を訪問したラッセルにとっては、革命後のロシアは個人の自由の抑圧された国家としてしかうつらなかつた。ラッセルは次のように書いている。

一九一七年十一月まで、自由主義は反動主義者のみから攻撃をうけていた。マルクス主義者たちは、他の進歩主義者たち同様、民主主義、言論の自由、出版の自由ならびに自由主義的な政府機関の必要を唱道していた。ソヴェト政府がひとたび政権を掌握すると、忽ち、中世のカトリック教会の教えに逆もどりした。即ち、権威の為すべき仕事は真理の宣伝であり、積極的に教化し、且つ、敵対する教説は圧迫するというのがカトリックの教えであった。(Power, Ibid., p. 80)

9 経済的権力 economic power

経済的権力は派生的なものであって、根源的なものではないとラッセルは言う。経済的権力は究極的には軍事力に依存しているものであって、国際間の経済的な法規を例にとってみても、その実現は、背景になっている自国あるい

は同盟国の軍事力があつてはじめて可能となる。従つて、個人の経済力は彼らの政府が、誰に対して領土への接近を許すかをとりきめた一連の法に従つて、必要とあれば武力を用いることができるという決定如何にかかつてゐる。一方、政府の経済力は、一部はその武力にかかり、一部は他国政府の条約や国際法への尊重の度合にかかつてゐる。

一国家内の経済的権力は、法や世論に依存するものであるが、買収や宣伝によつて法や世論を変えたり、政治家の自由を束縛する義務を政治家に押しつけたり、財政的危機をひき起すと威嚇したりするなどして、独立性を示すこともあるが、その独立性にも限度がある。政治家は権力を握るや否や、それまでの義務をふみにじつて顧みないことが起りうるからである。経済的権力は、今日、密接に軍事的権力と結びついている。これは、かつては経済的権力の基礎は商業であつて、原料の所有権ではなかったが、交通手段の改良と帝国主義のために商業の重要性が小さくなった今日では、戦争の遂行に必要な原料ならびに食糧を掌握することが国力の基礎となったのである。

ラッセルが経済的権力の集中度が高まるほど所有権と運営権とは分離してゆくことを指摘したことは、この当時としては新鮮であつた。大企業の通常の株主はほとんど経営上の発言力をもつことができない。このことは後に述べるように、国有化においても同じであつて、そこでは権力は国民全体に分散されるのではなく、少数の個人の手中におちるのである。

ラッセルはマルクス主義の階級闘争理論と革命理論に言及し、資本主義社会における革命の可能性を疑わしいとする理由をあげている。即ち、資本家によるプロレタリアートの支配は、革命を予見する場合、穏やかなものとなるし、熟練労働者は一般に保守的であり、豊かな富のある国のプロレタリアートは、その雇傭が景気如何にあるため、政治的には富者の側に立つ、また戦争時に、労働者は自分の階級より国家に忠誠を感じるものである。こうした理由のた

め、階級闘争はひとつの可能性にとどまるという。勿論、この見解は、第二次大戦直前のもので、歐洲の列強がスペインにおいてしのぎをけづっていた時代のものであったことに注意せねばならない。

一軍事単位のもつ経済力の構成要素としてラッセルは次の四つの能力をあげている。一、自国領土の防衛力、二、他国領土への威嚇力、三、原料、食糧、工業技術を所有していること、四、他の軍事単位によって必要とされた商品と役務を供給する能力などである。これらすべてにおいて、軍事的要因と経済的要因は、ときえぬほどに密接に結び合っている。——こうしたことから、経済的権力はあくまで、権力の一要素であって、その唯一の根源ではないのである。

10 意見を支配する力 power over opinion

意見もしくは世論は重要な政治のファクターであり、世論こそ政治を左右する第一義的なものと見なす考えもなくはないが、この考えは一面の真理にすぎないとラッセルは言う。というのも、意見（世論）それ自体もまたつくりだされるものであり、説得と強制の二段階をへて支配的となってゆくのである。

説得にもとづく意見は二つの形成の道程をたどる。ひとつは、科学的真理のような実証的な真理によって除々に説得されてゆく合理的なものと、今ひとつは宗教的性格を帯びた命題を真理として受け容れたいという宗教的な欲求が根底にあつて、それを非合理的な説得によって充してゆくということによってつくられてゆくものである。後者は広告の働きにも共通している。たとえば薬の効能を信じようとするのは、それによって健康の希望が与えられるからである。¹⁵「非合理的な宣伝は、合理的な宣伝と同じく、実在する欲望に訴えかけねばならないが、事実には訴えるかわり

に、反復をもってするのである」(Power, Ibid., p. 95) しかし、この説得によって得た意見は、当然の事ながら、実証的な裏付けによって支えられたものではない。

従って、「二つの信念が等しく欲望を充たすものである場合、信念を受け容れさせるためには、証拠力の弱い信念は証拠の強い信念以上に宣伝を行わねばならない」(Power, Ibid., p. 96) ことになる。これは言い換えれば、科学性(理性的、実証的)を帯びた信念の伝播力が、宗教性(非合理的、非実証的)よりはるかに強かったが故に、今日の科学技術社会を生みだしたことを示している。

国家によるプロパガンダにおいても、前述のように、それが国民の欲望に訴えるものでなければ力となり得ない。国民感情に反する国家宣伝は失敗に終る。そのため、統治という点から見れば、民主政治において一般人は宣伝に欺かれやすい条件をそなえている。というのも選挙民は戦争などの困難に直面させられてもなお自分たちは、為政者の選択を誤ったとは容易に認めたがらないからである。しかし、たとい国家が宣伝を独占したにせよ、それによって、政府が不死身インヴァルナブルになるわけではない、とラッセルは書いている。長期的には、権力者が一般の利益に無関心となり、そのために新しい革命を招くに違いないからである。

11 権力の源泉としての信条 *creed as sources of power*

ここでは信条が権力にたいして、どのような影響を及ぼすかという点についての検討がなされる。

ひとつの社会の権力は、その人数、経済資源ならびに技術的な能力によるが、同時にその社会のもつ信念によってもきまってくる。狂信的な信条は、社会の全成員が抱く場合には、その権力を大いに拡大することが多いが、一

方減ずることもある。(Power, Ibid., p. 99)

先ずこう述べたあと、ラッセルは史実にもとづいて信条の働きを注意深く分析し、回教の勃興が決して信条のみの力によって支えられたものでなかったこと、クロムウェルの勝利の秘密が多分に経済的な要素を含んでいること等を述べて、それら党派の勝利が、あたかも信条が人々を団結させた場合に権力の増大が著しいかのような印象を与えたのであって、むしろ信条は、特に、それが狂信に近づく場合、逆に権力の破綻を招いた例をあげ、「現代を通じて最も成功を収めた国民は、異端者の迫害をすることが最も少かった」(Power, Ibid., p. 101) と述べている。

しかし、今日よく問題にされる、国家の勢力は国民が教条の上で一致していること如何にかかっている、という見解の正否については、ラッセルが自身の見解を要約して述べた一節があるので、少し長いが引用しておきたい。

ある種の信条や感情は社会的結合のために必要だが、それが社会の勢力の源泉になるためには、純粹に、しかも深く大衆の大多数の心に侵透していなければならないし、それは技術的能力を担っている人々の相当多数の人々をつかんでいる必要がある。こうした条件が欠けていると、政府は検閲や迫害によって何とかして条件をつくらうとすることがあるが、検閲や迫害がきびしすぎると、人々は現実とのふれ合いを失ったり、知らねばならない重要な事実を知らずにいたり、忘れたりさせられる。権力を握っているものは、権力衝動によって考えが歪められるため、政府の方で思っている以上に、自由を阻むことになる。しかも、自由こそが国力の増大をもたらすものである。そのため、干渉に反撥する感情が、無政府状態をもたらしほどこでない程度に拡まっている方が、国力を増大させることになるだろう。(Power, Ibid., p. 105)

権力の源泉としての信条は、一時的には力を發揮するが、長期的に見た場合には、これが倦怠と懷疑を心に生ぜし

め、やがては、それが権力の強さを内部からつきくずしてゆくのである。¹⁶

註1 この問題については拙稿『政治にかんする科学と哲学』同志社法学第九二、九三、九四号を参照されたい。

2 ウェルドンのこの著作には、ラッセルの名もJ・L・オースチンの名もあげられていない。しかし、この著作の書かれた一九五〇年代においてJ・L・オースチンは、「オックスフォードにおいて、ウィットゲンシュタインと共に、神様扱いを受けていた哲学者」(アーネスト・ゲルナー)であった。ウェルドンが自分が最も影響を受けた哲学者の名を注意深く隠したということは大いにありうることである。(Ved Mehta, *Fly and Fly-Bottle*, 1965, London)

3 「一九三〇年代においてもラッセルは心配事や健康がすぐれないことがあっても、ジャーナリズムや著述に根気よく精を出して生活を支えねばならなかった」とフラン・ウッドはラッセルの伝記の中で記している。(Alan Wood, Bertrand Russell, *The Passionate Sceptic*, 1957, London, pp. 177-8) こうした時期において、ラッセルがこれほど大量の著作を次々と物していった秘密は口述筆記をする特技を彼が持っていたからである。ラッセルは『外界の知識』Our Knowledge of the External World, 1914 を口述筆記によって一気に仕上げたが、三十年頃の彼は専らこの方法を用いており「日に三千語をこなす」とインタビューに語っていた。(B. Russell, *Portraits from Memory and Other Essays*, 1956, London, pp. 195-6, Wood, op. cit., p. 162) これは筆者の推測にすぎないが、『権力』もおそらく口述筆記をもとにしたのではないかと思われる。というのも、『権力』における論理展開のきめの細かさと、やや冗長にすら思われるほど丁寧な例証をそえた説明は、ラッセルの筆になる短論文の特徴である単純さと、強い印象を与える短い文章、目ざめるような論理展開の素早さとはややかけ離れたものだからである。ひとは口で語るとき——とりわけ、ラッセルが言っていたように「速記者がついてゆける限りのフルスピードで口述する」場合には——筆をとって書く場合に、省かれたり抑制される細部や傍証が、制約がないため表に出てくることが多いのであろう。それが、この『権力』の面白さであり、『権力』がラッセルの政治社会的著作中の白眉である所以でもある。彼の政治哲学の本質的部分は殆んどこの書物の中に、何かのかたちで網羅されていると言っても過言ではない。

4 A. J. Ayer, in Bertrand Russell—*Philosopher of the Century*, 1967, London, p. 177.

5 Wood, op. cit., p. 180.

6 例えは、George Catlin, *A History of Political Philosophers*, 1950, London, pp. 756-9.

7 日本においては、高田保馬『勢力論』(一九五九)にその影響を見ることが出来る。高田氏は、その序文でラッセルの『権力』にかんし、

「私の学ぶところ極めて乏しかった」と書いているが、氏の著作はむしろその逆の事実を語っている。

8 ファシズムは別として、スターリニズムをどう把握するかには問題もある。平等の理念の実現と確立のためには自由権を一時的にでも束縛せねばならないという考え方には、「平等を伴わない自由は真の自由ではない」という前提の上に立てられている。筆者（小野）は、平等と自由が対立した理念であるとは考えていないが、平等は自由の理念に、価値において優先するとも考えない。言いかえれば、平等の実現は、自由の実現の充分条件ではないというのが筆者の立場である。この点にかんしては、モリス・デュヴェルジュ、『政治体制』の中で述べている点が簡潔で参考になる。Maurice Duverger, *Les Régimes Politiques*, 1961, Paris, とくに、その十九頁より二十五頁まで、邦訳白水社刊では、二十四―九頁。

9 高田保馬氏は権力を、勢力と名づけ「勢力とは服従せらるる能力である」と定義している。これは社会関係の支配と服従のパターンを基礎とし極端に単純化した権力の定義であるが、同意反覆の感がある。服従されざる能力は能力とは言い難いとするれば、服従せられることは能力と同意となり、「勢力とは能力なり」ということになる。かりに能力を支配能力とおきかえてみても、権力の意味内容を伝えたことにはならない。

10 Bertrand Russell (*In collaboration with Dora Russell*) 1923, London, p. 188.

11 この分類の仕方は前出の『産業文明の展望』における武力的権力、経済的権力、精神的権力という三つの分類の仕方に対応すると見てよいが、この展望では、この第三の精神的権力（これは「意見に及ぼす権力」とも表現されている）が、他の二つの権力の究極的源泉であるという見解を示している点において、権力の心理的側面の分析の強調が見られるが、『権力』に至ると、この傾向はうすれ、むしろ組織論的な説明への傾斜が強くなっている。

12 知識人についてのラッセルの論及は興味深い。彼によれば、知識人はいわば僧侶の精神上的の継承者であるが、科学の発達と普及によって、知識が独占できなくなった今日、知識人はその特権的な位置を失い、神秘のヴェールをはがされた。そのため現代世界に不満を抱くようになり、そのうち不満の少ない者が共産主義に惹かれ、不満の大きい者は象牙の塔に閉じこもるという。（Power, *Ibid.*, p. 31）

13 トラシユマコスやマキャヴェリの思想は、ラッセルの言うように、むきだしの権力の行使に根拠を与えたことは事実であろう。しかし、その思想は、同時に、政治をあるがままの姿としてとらえる現実主義的な政治理論の基礎をきづいたということ忘れてはなるまい。即ち、これらの思想は、スピノザが警告したように、哲学者たちが願望の政治理想を非現実な架空論として説いてきたのに対し、きびしい現実の政治体験にもとづいた事実にも即した理論を打ち出し、理想論よりはるかに高い科学性を帯びていたためであると言いうる。プラトンの『国家』の全巻は現実主義者トラシユマコスのひと言に対する反駁として書かれたとすら言いうるのであり、その結果生みだされたのは、共産主義者の思想であった。

またマキャヴェリの『君主論』が、近代政治学の出発点であったと今日目されているのも、その政治世界への鋭い分析力のためである。

- 14 ラッセルは、革命的権力が発揮された典型的な例として、一 初期キリスト教、二 宗教改革、三 フランス革命とナショナリズム、四 社会主義とロシア革命の四つをあげて詳しく説明しているが、この革命的権力のパターンを、それぞれの場合にあてはめ、初期キリスト教徒、ルター、ヘンリー八世、クロムウェル、ロベスピエール、更にはレーニンまでを歴史的時点を越えて、革命的権力の系統として結び合わせているのは興味深い。

- 15 この点を早くから指摘していたのは、プラグマティズムの始祖のC・S・リースであった。リースは『信念の確定』The Fixation of Belief, 1878.の中で、この点をとりあげている。彼は『信念の確定方法』と題した第五節で次のように述べている。「意見（信念）の確定が探究の唯一の目標であり、信念が習慣の性質をもつものならば、なぜつぎのような方法を採用しないのだろうか。ある問題にたいする解答として気に入ったものを取り上げ、それをたえず心に繰り返し、その信念を強化するのに役立つものなら何でも心にとめ、その信念の妨げとなるものには悔蔑と憎悪をもって背を向けることによって望ましい目的を達するという方法を」（上山春平訳、『プラグマティズム』河出書房新社、一九六三年、六七頁）

ラッセルのあげる宗教的な意見というのは、リースのこれに類似した非合理的な方法を世論操作の上に应用することによって、プロパガンダの効果が達せられるということを意味している。言うまでもないが、ラッセルは、こうして得た信念を危険なものとしている。この点については、本稿11「権力の源泉としての信条」で論じられている。

- 16 ラッセルのこうした見解は、いわばファシズム批判の中核をなすものであって、彼の数々の社会的著作、とりわけ、『権威と個人』Authority and the Individual, 1949の重要なテーマになっている。この命題は、今扱っているこの『権力』の後章においても幾度か浮び上ってくる。それは権力のダイナミズムが必然的に生み出してくる権威——即ち権力組織——と個人との葛藤の問題であって、言いかえれば、この問題を論ずることは、自由について論ずることに結びついてゆくのである。

（上）の終り